

『白黒』における小沢剛《地蔵建立》

金 長 隆 子

はじめに

本論では、美術家・小沢剛⁽¹⁾(1965年5月26日-)の初期作品《地蔵建立》をとりあげる。《地蔵建立》は、東京芸術大学(以下、芸大と略する)の学生だった小沢が、大学3年生の1988年から制作を開始した作品である⁽²⁾。以後、《地蔵建立》は初期の姿から変化しながらも断続的に長期間にわたって制作されていくことになるが、2009年に開催された広島市現代美術館での個展の際に作られた《地蔵建立》以降は制作されていない。

これまで《地蔵建立》は、風景に地蔵を配置した青みがかったモノクロームの写真への注目とあわせて語られることが多かった⁽³⁾。しかしながら、《地蔵建立》が最初に発表されたのは『白黒』という同人誌上であり、そこには様々な場所に地蔵を配置した白黒の画像⁽⁴⁾と文章が同時に掲載されていた。

本論では、『白黒』1号から3号で発表された《地蔵建立》に焦点を当てることとする。白黒の画像と文章を用いて、地蔵を建立するという「コトの全体」を提示した作品だった初期の《地蔵建立》について記述することによって、最初に発表された地点から《地蔵建立》を見つめ直し、『白黒』における《地蔵建立》とはどのような作品であったのかを再考する。

1. 『白黒』1号の《地蔵建立》

小沢は22歳になる1987年に家主の老婆の絵をカーテンに描いた《ババア・オン・ザ・カーテン》という作品を制作した。後日、陶芸用粘土で老婆の頭部を毎日2時にひとつずつ作り、その頭部をさまざまな場所に置いて撮影する《一日一首》という作品を制作していった。これが《地蔵建立》のアイデアの原型になったという⁽⁵⁾。

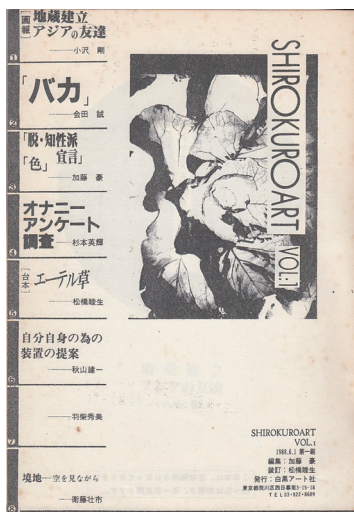
《地蔵建立》は、絵を描くことに行き詰っていた小沢が絵画以外の表現方法を模索した結果、小沢自作の簡素な泥地蔵⁽⁶⁾を見慣れた風景に配置したところを写真に撮るという行為によって、身近な日常風景を再確認することから始められた⁽⁷⁾。1988年の3月に大学の春休みを利用して、羽田から立川まで多摩川沿いに地蔵を設置していき、《地蔵建立》をおこなっていった。多摩川沿いから始められた理由は、小沢が6歳から東京都の日野市で育っていて、多摩川沿いの景色に

馴染んでいたからだろう⁽⁸⁾。

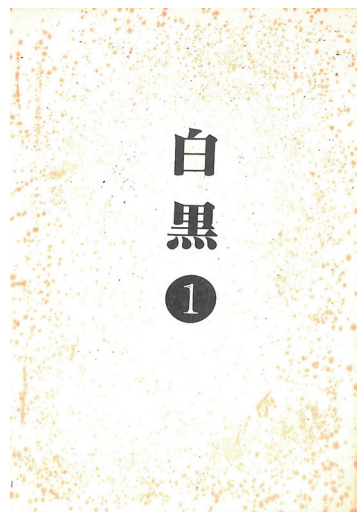
1988年から2009年までの制作期間には、撮影用のカメラとして、おもにミノルタ X-7（1982年発売）と Konica HEXAR（1992年発売）の二機種が使用されている⁽⁹⁾。ミノルタ X-7は、女優の宮崎美子のCMで話題となったカメラで、シンプルな操作性が追及され、軽量でコンパクトな一眼レフ入門機として販売されたモデルだ⁽¹⁰⁾。Konica HEXARは、レンズ固定式の高級コンパクトカメラで、静音設計に優れ、スナップショットに適したモデルだった⁽¹¹⁾。カメラの発売時期から『白黒』に掲載された《地藏建立》は、ミノルタ X-7で撮影されたことになる。

《地藏建立》の最初の発表は、同人誌『白黒』創刊号刊行日であるから、それが正しいとすれば1988年6月1日ということになる。芸大の油画科で小沢の同級生だった加藤豪の発案によってつくられた『白黒』には、その当時、加藤と親しくしていた小沢や会田誠らをはじめとする5～6名が中心メンバーとして参加した。さらに参加メンバーの各々が周辺の気になる人に声をかけて、ゲストメンバーのような形で投稿してもらった⁽¹²⁾。

『白黒』1号は加藤が編集長を務め、デザイン科の同級生だった松橋陸生が表紙のデザイン【図1】などを担当した⁽¹³⁾。目次を見ると、同号には8名が参加しており、各人の掲載に番号がつけられている【図2】。①は小沢で、[画報]として《地藏建立》と《アジアの友達》⁽¹⁴⁾というふたつの作品を掲載している。②が会田で「バカ」という題名の作品を載せている。③は『白黒』の発起人ともいえる加藤で、「脱・知性派宣言」、「色」というふたつの文章作品を投稿している。④が杉本英輝「オナニーアンケート調査」、⑤が装丁を担当した松橋陸生の「[台本] エーテル草」、⑥が秋山健一を書く「自分自身の為の装置提案」、⑦が羽柴秀美で、写真・画像・手書きの文章による無題作品を寄せている。最後の⑧が衛藤壮市のデッサンと詩からなる「境地—空を見なが



【図2】『白黒』1号目次



【図1】『白黒』1号の表紙

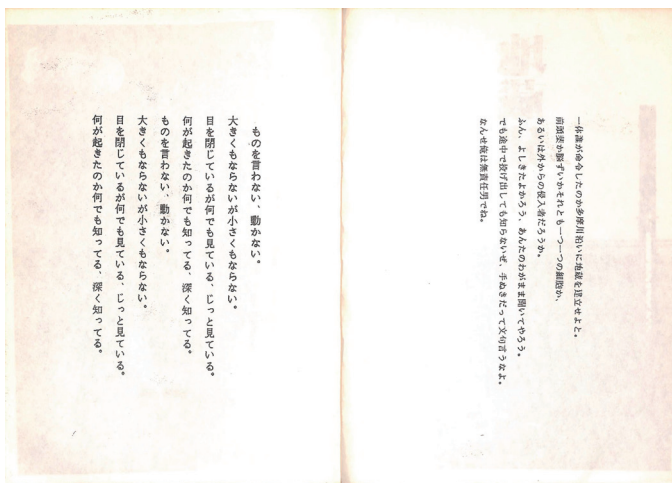
ら」。

『白黒』に掲載する作品の版下は参加メンバー各自が持ち寄った。そのためか、それぞれ体裁がバラバラで文字だけに注目してみても、手書き文字、写真植字機（写植機）による文字、ワープロの文字などさまざま⁽¹⁵⁾。目次や表紙などはデザイン科にあった写植機で文字を打った。油画科にあったリソグラフで持ち寄った原稿を印刷したのち、それらを木工用ボンドで平綴じしたものに表紙を貼って、学内の裁断機で裁断した。これらの作業は中心メンバーが自ら行い、『白黒』1号は200部刷ったそうだ。そのようにして制作した『白黒』は学内で教授などに配布したほか、学内の生協や芸祭で販売したという⁽¹⁶⁾。今日では比較的簡単にできるようになった同人誌の制作も30年前の1988年時には、とても手間が掛かる作業だった。

『白黒』は3号までしか発行されなかったが、小沢は1号から3号まで一貫して《地蔵建立》のシリーズを掲載している。後年に出版される小沢の展覧会の図録や作品集などで見られるこの時期の《地蔵建立》は、青みがかったモノクロームの写真を使った作品として掲載されているが、当初は白黒の画像を使用した作品として発表されていた。それにくわえて、『白黒』に掲載された《地蔵建立》と『白黒』以後に発表された《地蔵建立》には大きな違いがあった。それは画像とは別に文章表現の頁があったり、画像内に文章が入っていたりしていたことだ。

中扉には、羽田で撮影された白黒画像⁽¹⁷⁾に「地蔵建立」と題名が書かれている【図3】。これをめくると、見開き右の頁は右側にある小口を上、左側にあるのどを下とする横位置になっていて、横書きの文章が載せられている【図4】。

右頁には、「一体誰が命令したのか多摩川沿いに地蔵を建立せよと。／前頭葉か脳ずいかそれとも一つ一つの細胞か、／あるいは外からの侵入者だろうか。／ふん、よしきたよかろう、あん



【図4】『白黒』1号に掲載された《地蔵建立》冒頭の文章頁見開き



【図3】『白黒』1号、《地蔵建立》中扉（羽田）

たのわがまま聞いてやろう。／でも途中で投げ出しても知らないぜ、手ぬきだって文句言うなよ。／なんせ俺は無責任男でね。」と書かれている。この文章は、多摩川沿いに地蔵を建立していく行為を写真に収めていくというアイデアのひらめきが、小沢に地蔵建立を促す未特定の存在への語りかけを通して言語化されている。

左の頁は縦位置となっていて、縦書きの文章が載っている。注意深く見ると、文字の大きさや字体も右頁とは異なっていて、左頁の文字の方が幾分か大きくなっている。左頁の文章には、「(一字下げ) ものを言わない。動かない。／大きくもならないが小さくもならない。／目を閉じているが何でも見ている、じっと見ている。／何が起きたのか何でも知ってる、深く知ってる。／ものを言わない、動かない。／大きくもならないが小さくもならない。／目を閉じているが何でも見ている、じっと見ている。／何が起きたのか何でも知ってる、深く知ってる。」と書かれている。こちらの文章は、建立する地蔵がどのような存在であるかが記述されている。

つまり、この見開き頁には《地蔵建立》の開始宣言と地蔵の存在様態という異なった次元の事柄についての記述が、割付頁の差違をとおして、視覚的にも表現されているといえる。

地蔵は見慣れた風景に小沢自身の手をくわえるために置いたと後に小沢は答えている⁽¹⁸⁾。《地蔵建立》の原型となった《一日一首》では、小沢が陶芸用粘土でつくった人体の頭部が使用されていたわけだが、風景に手をくわえることができればそれほどのこだわりはなく、どのような形状でもよかったというのが小沢の見解だ。小沢は《地蔵建立》を開始した時、撮影場所に地蔵を置いたことは直感であり、特に意図したものではなかったことを美術批評家の新川貴詩のインタビューでも答えている。

新川「地蔵建立のシリーズは、大学生のころから始めたんだよね。」

小沢「そう。でも作品というより、トレーニングという感じで始めた。あのころは、何か新しいことに取り組みたい気持ちが強かったんだけど、どんな方法がいいのかわかんなくてさ、あがきの連続だった。で、とりあえず地蔵を置いて写真を撮ってみた。まさか地蔵シリーズを十年以上も続けるとは思ひもしなかったよ。始めた当初ですら、何でこんなことやっているのか、自分でもよくわかんなかったもん。本当に直感だけ。明確なコンセプトなんてなかった。「なんで地蔵か?」と当時も聞かれたけど、「なんでもよかった」「形がよかった」「見る人によって解釈が違う」とか、理由にもならないような理由で説明するしかなくてさ。そのへんは、いまもたいして変わらないけど。」⁽¹⁹⁾

しかし、地蔵が設置対象として直感的に選択されたのだとしても、その直感の胚胎にはそれなりの背景がやはり存在していたとも思われる。

地蔵が選ばれ配置されるようになったことには、いくつかの理由が考えられる。平安時代中期

『白黒』における小沢剛《地蔵建立》

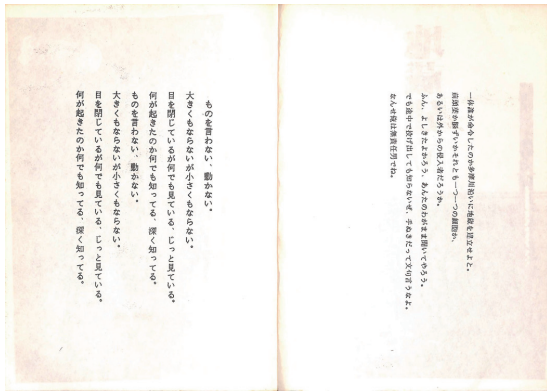
以降に盛んになった地蔵信仰は、はじめは仏教と結びついていたが、地蔵菩薩は徐々に特定の宗教を超えて庶民に親しまれ、民間信仰の対象となっていった。地蔵菩薩は菩薩像でありながら、人間の僧侶のように衣と袈裟を身に着けた姿で表現され、人間道や地獄道といった六道のいたるところに現れて我々大衆を救う⁽²⁰⁾。つまり、親しみやすい姿でありながら現世から死後まで、あらゆるところに現れて大衆を救うとされる地蔵を作品に使うことによって、地蔵が担っている背景と宗教的な次元を作品に取り込むことになる。地蔵を置くことによって、景色が変化し支配されることになるわけだが、そこには、神聖な何ものかを生成させたい作者の無意識的な欲求が介在している。

また、小沢が浪人中の1984年に芸大で地蔵が注目された事柄があったことも作品に地蔵が使われる契機となりえていたのかもしれない。1983年6月に奈良の新薬師寺から芸大の美術学部へ依頼されていた木造地蔵菩薩立像（伝景清地蔵）の調査と修復が終わり、1984年10月に芸大の芸術資料館ロビーで地蔵菩薩が公開された⁽²¹⁾。調査の結果、この地蔵が世界的にも例のない仏像だということが明らかになったため新聞などで報道されたのである⁽²²⁾。この地蔵に関する報告は1986年にされたので、その頃には芸大の学生だった小沢もこの件について耳にしていた可能性は高い。

『白黒』1号の《地蔵建立》は、以下のような構成となっている。

- ・中扉頁 羽田【図3】
- ・文章頁見開き【図4】
- ・「1 羽田飛行場付近」【図5】、「2 京浜急行の棧橋と東海道線の鉄橋の間」【図6】
- ・「3 二子玉川付近」【図7】、「4 京王多摩川付近」【図8】
- ・「5 府中競艇付近」【図9】、「6 関戸橋付近」【図10】
- ・「7 立川市富士見町付近」【図11】

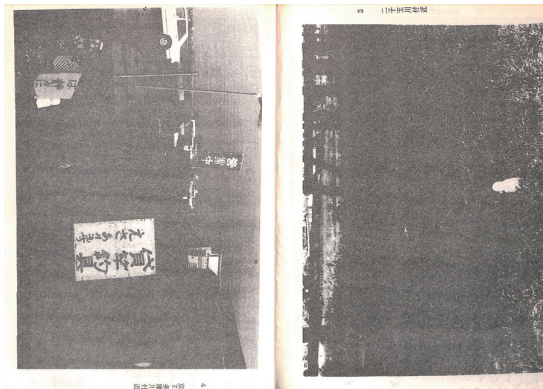
『白黒』1号に掲載されている《地蔵建立》の白黒画像は、中扉のものを入れて8枚ある。中扉（羽田）以外の白黒画像には、縦位置・横位置にかかわらず画像の右横に、通し番号と撮影された場所がキャプション風に記されている。最終頁「7 立川市富士見町付近」【図11】には画像内の上部に「いいじゃない／いいじゃない／立ちつづけてる」という三行の文章が入っている。横位置になっている白黒画像の天地の向きが、1から3までは右側が地、左側が天になっているが、4から6までは右側が天、左側が地となっている。つまり、1から3と4から6の白黒画像の向きが反対になっているわけだ。これは『白黒』1号が左右両開きの作り⁽²³⁾になっていることを意識して、画像掲載部がシンメトリーの構造になるように白黒画像を配置したためではないかと考えられる。画像内に人の姿はなく、地蔵がひっそりとあらわれて、静かに佇んでいるかの



【図4】
文章頁見開き

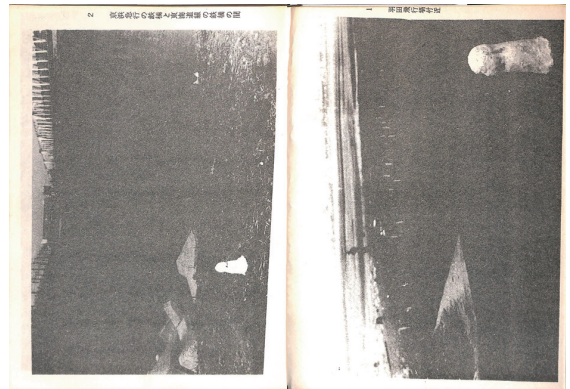


【図3】
中扉（羽田）



【図8】
「4 京王多摩川付近」

【図7】
「3 二子玉川付近」

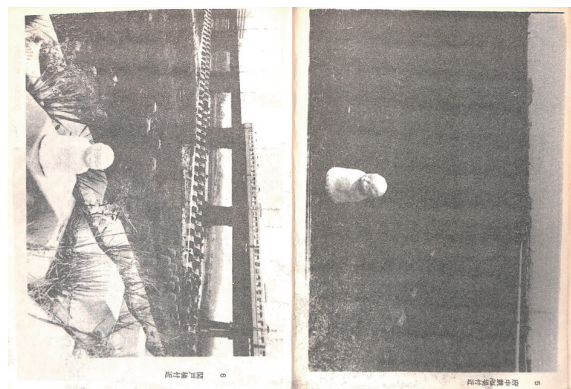


【図6】
「2 京浜急行の棧橋と
東海道線の鉄橋の間」

【図5】
「1 羽田飛行場付近」



【図11】
「7 立川市富士見町付近」



【図10】
「6 関戸橋付近」

【図9】
「5 府中競艇付近」

『白黒』における小沢剛《地蔵建立》



【図12】『白黒』1号《地蔵建立》8箇所の各建立場所付近に印を付けた地図（筆者作成）

ようなものばかりである。

一枚一枚の《地蔵建立》画像を見ているだけではわからないが、中扉につづけて番号の順番に場所を追っていくと羽田沖の河口から多摩川沿いを40km以上北上して、小沢が育った日野市付近である立川市まで到達したことがわかるように並べられていて、小沢が地蔵を建立してゆく歩みの時間を感じさせるようになっている【図12】。

2. 『白黒』2号の《地蔵建立 夜編》

1988年に大学3年時の夏休みを利用して、小沢は香港からギリシャまで《地蔵建立》をしながらシルクロードを旅している⁽²⁴⁾。しかし、同年の12月1日に発行された『白黒』2号には、この旅行中におこなわれた《地蔵建立》が掲載されることはなく、上野や池袋あたりでおこなわれた《地蔵建立 夜編》が掲載され、末尾には「フロク JIZO PAPER KIT」が添えられた。

『白黒』2号の編集メンバーは、加藤豪、会田誠、松橋陸生であると目次には明示されている【図13】。『白黒』1号の参加メンバーは8人だったが、『白黒』2号では15人に増えている。掲載されている作品を順番に見ていくと、小沢の《地蔵建立 夜編》、つづいて会田誠「前衛小説」、名前無木人「詩「おうえんか」」、秋山建一「VOLUTE SYSTEM」（目次には「VALUTE SYSTEM」と誤記されている）、平田哲朗と岡本洋平の「[RENGWA]」、坂口寛敏「美食祭 第一幕」、松橋陸生「パフォーマンス TWO FLAGS のための PICTURE STORY」、安井洋介「甘えること〈掃除機のような〉」、横詰文之「蚊についての空想」、片田直久「おまえは猪木になれ！—A・猪木試論」、東秀明「無病息災」、大村雄一郎「I.U.D.」、白黒のつどい、しろくろ歌壇、あいだまこと「お花畑」、羽柴秀美「極東不具の墓石と遺言」、加藤豪「ネオ・ナショナリズム宣言」、「フ

白黒のついで しんくろ歌壇 49	おまえは排水にたれ 八景池水鏡 36	地蔵建立夜編 3	VALITE SYSTEM 15
JIZO PAPERKIT 加藤 肇 70	「お花畑」 あいだこ 51	小沢剛 前附小説 11	「BONWA」 相田 隆 20
	「蚊についての空想」 加藤 肇 70	盆田 誠 11	「美食祭 第二幕」 坂口 眞 24
	「おまえは排水にたれ」 加藤 肇 70	成りゆえんか 13	
	「お花畑」 加藤 肇 70	名取 眞人 13	

【図13】『白黒』2号 目次

ロク JIZO PAPERKIT】【図22】となっている。なお、目次には、横詰文之「蚊についての空想」と記されているが、これは掲載されていない。

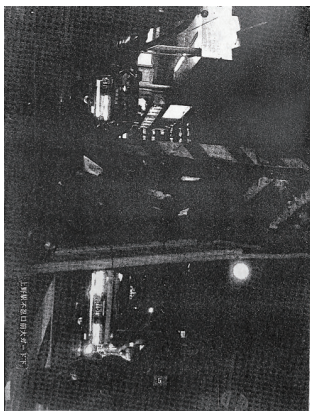
『白黒』2号《地蔵建立 夜編》の中扉【図14】は、文字だけで成り立っている。縦位置の右側に「地蔵建立 夜編」と太字の縦書きでタイトルが記され、その題名の下に縦位置横書き白抜きで「小沢剛」の名前。その左には、右側のどを天、左側小口を地とする横位置に横書きの文章があり、「何が悲しゅうて立っているんや／何がおかしゅうてじっとしとるんや／夜は寒いやろなあ／雨の日はしんどいやろなあ／わいも今日はずっと立ってるんが／何もおもろかない。／なあ、お地蔵さん／あんた何考えてんのや」と関西弁で地蔵へ語りかけるかのような調子の文章が記されている。「夜は寒いやろうな」という発言や、「上野公園」【図20】の景色、人々の服装から、おそらくは1988年秋になってからの「地蔵建立」だと推定できる。

《地蔵建立 夜編》の白黒画像は、7枚すべてが、この文章と同じく、右側が天、左側が地となる向きの横位置に配されている。通し番号は付けられておらず、白黒画像内の右下に地蔵が建立された場所が以下のように記されている。

- ・「上野駅不忍口改札」【図15】、「上野駅不忍口前大ガード下」【図16】
- ・「上野仲町通り付近大国館前」【図17】、「上池袋四丁目いずみ湯コインランドリー」【図18】
- ・「大塚駅プラットホーム」【図19】、「上野公園」【図20】
- ・「上池袋三丁目ミニストップ」【図21】

おもに東京芸術大学の周辺である上野界限と当時小沢が住んでいた近所の池袋、大塚が選ばれ

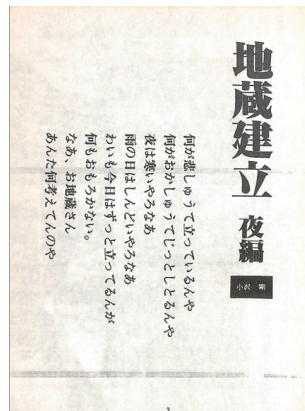
『白黒』における小沢剛《地蔵建立》



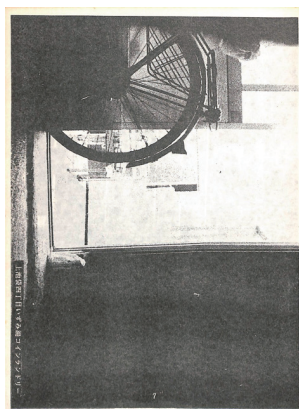
【図16】
「上野駅不忍口前大ガード下」



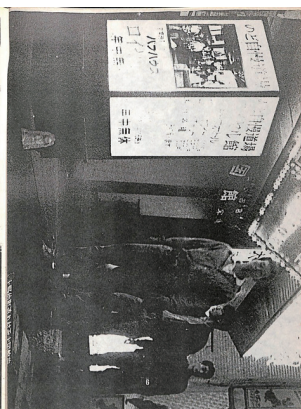
【図15】
「上野駅不忍口改札」



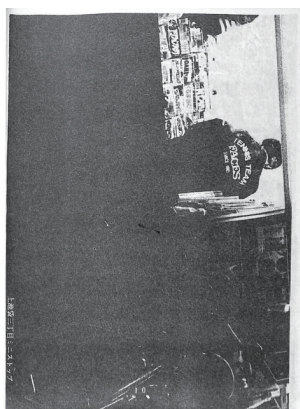
【図14】
《地蔵建立 夜編》中扉



【図18】
「上野仲町通り付近大国館前」



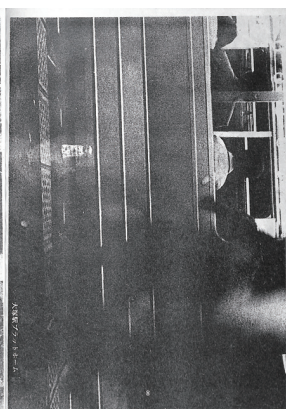
【図17】
「上池袋四丁目いずみ湯
コインランドリー」



【図21】
「上池袋三丁目ミニストップ」

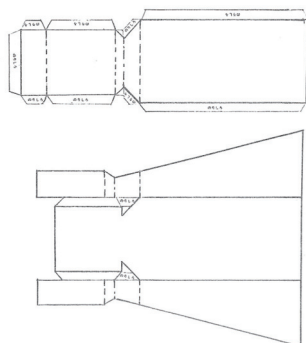


【図20】
「上野公園」

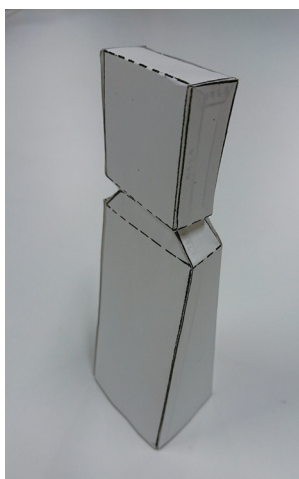


【図19】
「大塚駅プラットフォーム」

フロク JIZO PAPER KIT



【図22】 「フロク JIZO PAPER KIT」



【図23】 「フロク JIZO PAPER KIT」
を組み立てたもの

ている。《地蔵建立 夜編》が『白黒』1号掲載の《地蔵建立》ともっとも違うところは、地蔵が都会に建立され、人間の生活の場にあられるという点だろう。ゴジラが海から登場し、都会に進んでゆき、大きな破壊をもたらしていくのとは逆に、地蔵は川のアたりから登場し、心の救済を祈念して上野や池袋にあられるのだが、その願いはほとんど無視されるかのように見え、それは都会の空虚を浮き彫りにしていく。《地蔵建立 夜編》はそんな風に見えるが、その場に置かれることによって、わずかにせよ祈りの質が逆に浮かび上がってくる。地蔵は無視されながらも、都会のなかで行き交う人々の安寧を祈る、そういう宗教的な気配が『白黒』1号の《地蔵建立》よりも色濃く漂ってくる。

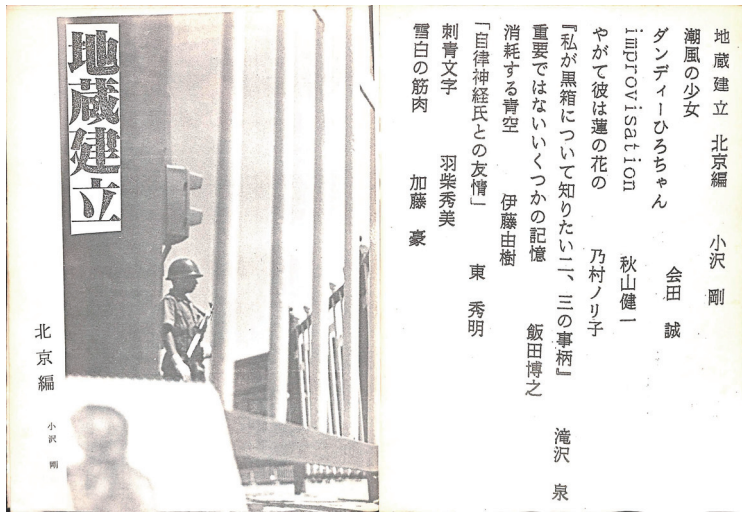
「フロク JIZO PAPER KIT」【図22】は立体に組み立てると、【図23】のようになる。

3. 『白黒』3号の《地蔵建立 北京編》

1989年2月の卒業制作展を終えて、4月に東京芸術大学大学院壁画専攻（指導教授：麻生秀穂）に進んだ小沢は、8月に天安門事件直後の中国へ行った⁽²⁵⁾。その北京体験から生まれたのが、『白黒』3号に掲載された《地蔵建立 北京編》だった。

『白黒』3号は1989年9月に発刊され⁽²⁶⁾、10名が参加している。3号には帯が付されており、そこには、「幻の文芸アート雑誌『白黒』が一年の沈黙を破り／今ここに堂々の第三弾！ マニア待望の一冊／本質マガジン」と書かれていて、その右横に落書きのようなキューピーと少女の絵が描かれている。

目次頁は前号よりもぞんざいで、デザイン構成はなく、編集、刊記などの情報なども載っていない【図24】。掲載順にあげれば、小沢剛《地蔵建立 北京編》、会田誠は「潮風の少女」と「ダ



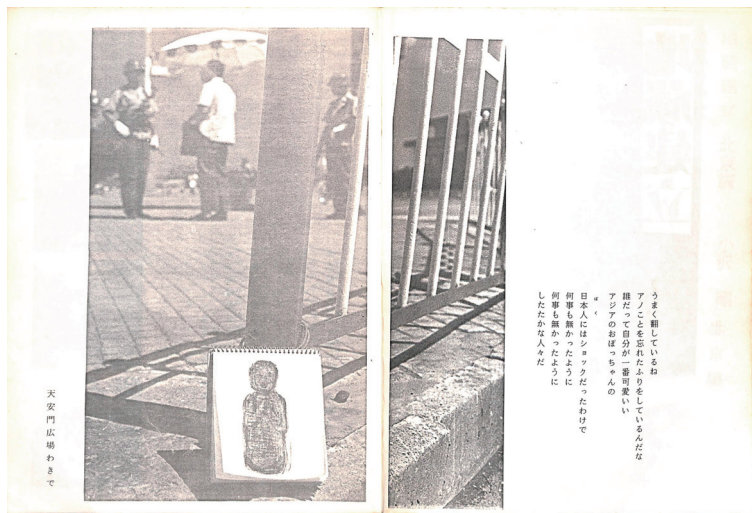
【図24】『白黒』3号 目次頁と《地蔵建立 北京編》中扉

ンディーひろちゃん」の2作品。次が秋山健一「improvisation」、乃村ノリ子「やがて彼は蓮の花の」、滝沢泉「『私が黒箱について知りたい二、三の事柄』」、飯田博之「重要ではないいくつかの記憶」、伊藤由樹「消耗する青空」、東秀明「『自律神経氏との友情』」、羽柴秀美「刺青文字」、加藤豪「雪白の筋肉」となっている。

《地蔵建立 北京編》は中扉を含めて10頁の分量である。中扉は画像内左上に「地蔵建立」、画像外左横下に「北京編 小沢 剛」と縦書きされている【図24】。白黒画像には、天安門広場の鉄柵の間から銃を身構えて警備している兵士が見え、鉄柵の手前にはクロッキー帳に描かれた地蔵が立て掛けられている。カメラの焦点は兵士にあたっており、手前の地蔵の形象はぼやけているが、面積はむしろ地蔵の方が大きい。

《地蔵建立 北京編》に頁番号は記入されていないが、中扉を1頁とし、それをめくると2-3頁にあたる見開きにまたがって白黒画像【図25】が掲載されており、こんどは、ここに顕在する者の存在を明示するかのように、地蔵にピントがあわせられている。おそらく、クロッキー帳は中扉の画像と同じ場所に置かれている。見開き左頁の余白に「天安門広場わきで」とある。右頁の余白には、「うまく翻しているね／アノことを忘れたふりをしているんだな／誰だって自分が一番可愛い／アジアのおぼっちゃんの／日本人にはショックだったわけで／何事も無かったように／何事も無かったように／したたかな人々だ」という文章が書かれている。

態度を「ひるがえし」何事も無かったようにふるまう兵士、人民に向けられた言葉だ。もちろん、この年の4月からはじまった民主化を求める学生たちのデモが、5月の戒厳令を経て、6月に至り中国人民解放軍によって鎮圧され、多くの学生たちが犠牲となった天安門事件⁽²⁷⁾についての言及である。この事件に「ショック」を感じた「日本人」、すなわち「アジアのおぼっちゃん



【図25】《地蔵建立 北京編》2-3頁

んの」小沢剛はどうふるまったか。「何事も無かったように」は、ふるまえなかった小沢は、天安門広場に地蔵を建てた。

次の頁からは小沢の文章「騒々しい沈黙なのか…」が最終頁まで掲載され、文章の周辺には合計10点の画像が配されている。画像のうち9点はほぼ5.5cm×5.5cmの正方形で、最終頁に掲載されているものだけが、8cm×11.5cmのサイズだ。見開きごとに、文章を記していこう。【図26】は《地蔵建立 北京編》4-5頁にあたる見開きである。

【騒々しい沈黙なのか…】

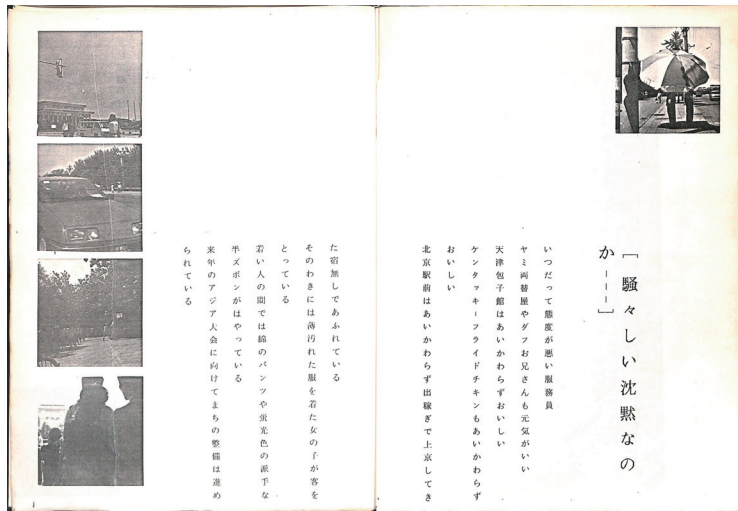
いつだって態度が悪い服务员／ヤミ両替屋やダフお兄さんも元気がいい／天津包子館はあいかわらずおいしい／ケンタッキーフライドチキンもあいかわらず／おいしい／北京駅前はいかわらず出稼ぎで上京してき／た宿無しであふれている／そのわきには薄汚れた服を着た女の子が客をとっている／若い人の中では綿のパンツや蛍光色の派手な半ズボンがはやっている／来年のアジア大会に向けてまちの整備は進め／られている

天安門事件のすぐあとなのに、もうそれを忘れてしまったかのような北京の日常を、小沢は見たのだった。

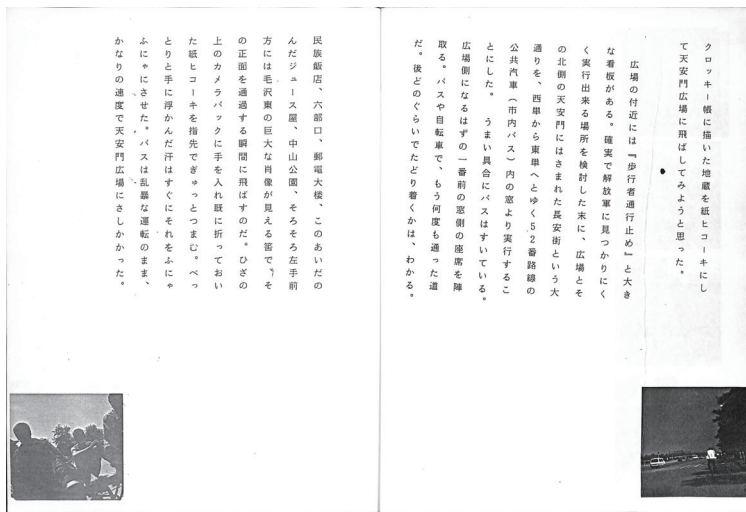
これに続く見開き6-7頁に載る文章を以下に記す【図27】。

クロッキー帳に描いた地蔵を紙ヒコーキにし／て天安門広場に飛ばしてみようと思った。／（※一行空き）／（※一字下げ）広場の付近には『歩行者通行止め』と大き／な看板がある。

『白黒』における小沢剛《地蔵建立》



【図26】《地蔵建立 北京編》4-5頁



【図27】《地蔵建立 北京編》6-7頁

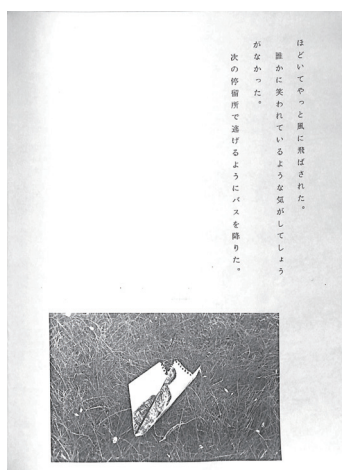
確実に解放軍に見つかりにくく／実行出来る場所を検討した末に、広場とそ／の北側の天安門にはさまれた長安街という大／通りを、西単から東単へとゆく52番路線の／公共汽車（市内バス）内の窓より実行するこ／とにした。うまい具合にバスはすいている。／広場側になるはずの一番前の窓側の座席を陣／取る。バスや自転車で、もう何度も通った道／だ。後どのぐらいでたどり着くかは、わかる。／民族飯店、六部口、郵電大樓、このあいだの／んだジュース屋、中山公園、そろそろ左手前／方には毛沢東の巨大な肖像が見える筈で、そ／の正面を通過する瞬間に飛ばすのだ。ひざの／上のカメラバックに手を入れ既に折っておい

／た紙ヒコーキを指先でぎゅっとつまむ。べっ／とりと手に浮かんだ汗はすぐにそれをふにゃ／ふにゃにさせた。バスは乱暴な運転のまま、／かなりの速度で天安門広場にさしかかった。

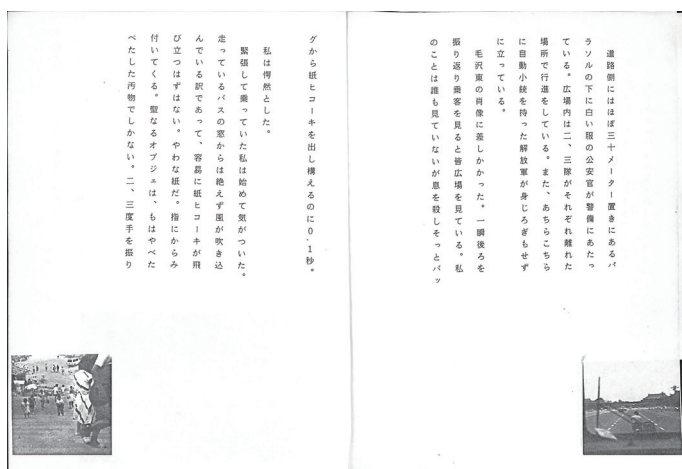
この次の見開き頁8-9頁【図28】と最終頁【図29】の文章を転載する。

(※一字下げ) 道路側にはほぼ三十メートル置きにあるパ／ラソルの下に白い服の公安官が警備にあたっ／ている。広場内は二、三隊がそれぞれ離れた／場所で行進をしている。また、あちらこちらに自動小銃を持った解放軍が身じろぎもせず／に立っている。／(※一字下げ) 毛沢東の肖像に差しかかった。一瞬後ろを／振り返り乗客を見ると皆広場を見ている。私／のことは誰も見ていないが息を殺しそっとパツ／グから紙ヒコーキを出し構えるのに0.1秒。／(※一行空き)／(※一字下げ) 私は愕然とした。／緊張して乗っていた私は始めて気がついた。／走っているバスの窓からは絶えず風が吹き込／んでいる訳であって、容易に紙ヒコーキが飛／び立つはずはない。やわな紙だ。指にからみ／付いてくる。聖なるオブジェは、もはやべた／べたした汚物でしかない。二、三度手を振り／ほどいてやっ／と風に飛ばされた。／(※一字下げ) 誰かに笑われているような気がしてしよ／うがなかった。／(※一字下げ) 次の停留所で逃げるようにバスを降りた。

見開き頁に配された5.5cm×5.5cmの正方形の白黒画像の冒頭は「パラソルの下に白い服の公安官が警備にあたっている」場面だろう。このサイズの画像には天安門へ向かうバスの中の小沢



【図29】《地藏建立 北京編》
最終頁



【図28】《地藏建立 北京編》8-9頁

『白黒』における小沢剛《地蔵建立》

の目に映る北京の日常に呼応する景色が基本的には散らされているとみていい。上の文章は、描かれた地蔵を紙ヒコーキにして、バスの車内から天安門広場に向かって飛ばそうと思いつき、吹き込む風に阻まれながら、ようやくそれを実現した自身についての言及である。紙ヒコーキとなった地蔵を小沢は「聖なるオブジェ」と呼んだが、それはまた指に絡みつく「汚物」でもあった。附着した「汚物」を振り払うように、小沢は「聖なるオブジェ」を風に乗せ、逃げるようにバスを降りた。ゴッホは絵を売り払って得た金を手にしながらも、近づいてくる物乞いの女に、その金を渡し、その行為を恥じるかのように、その場を離れていったそうだが⁽²⁸⁾、それに似た恥じらいがここにはある。犠牲になった若者たちへの鎮魂の意を込め「聖なるオブジェ」を天安門広場に届けようとする思い、それは真摯なものであっても、状況は変えられるはずもなく、所詮ぶざまな自己満足に終わる。そういう「汚物」がこの「聖なるオブジェ」にまわりつく。「やわな紙」は、小沢自身でもあった。

最終頁には、草の上に落ちた地蔵紙ヒコーキの白黒画像が掲載されている。バスを降りて、その紙ヒコーキを探して撮影したのか、それとも事前に撮影しておいたのか、それはわからないが、天安門広場ではないにせよ、地蔵尊は実際、その近辺に降り立ったのである【図29】。

4. 『白黒』における《地蔵建立》

『白黒』1号の《地蔵建立》は、多摩川沿いで行われていた。画像内に人の姿はない。地蔵は、人知れず多摩川沿いに、あらわれたかのようなようである。

『白黒』2号の《地蔵建立 夜編》における地蔵は、出現の場を人の行き交う夜の都会に移す。地蔵は人々の祈りや願いを受けとめに来たかのようなのだが、人々は地蔵を意識することなく通り過ぎ、ときに地蔵は坐る人もいないベンチの下に孤影をさらしていたりする。

『白黒』3号の《地蔵建立 北京編》の地蔵は、日本を離れ、天安門広場に登場する。天安門広場あたりにいる人々は、事件などなかったかのような日常を送っている。ヤミ両替屋もダフ屋も元気が良い。北京駅前には宿無しの出稼ぎであふれかえっていて、そのあたりには客引きの女性もいるし、蛍光色の派手な半ズボンをはいた若者も目につく。普段どおりの喧騒が戻り、天安門事件の痕跡は見当たらない。

そんなはずはない、これは「騒々しい沈黙なのか」と小沢はつぶやく。

地蔵の存在に気づく人はいない。それは『白黒』2号の《地蔵建立 夜編》と同じだ。天安門広場近辺にいる人々との関係でいえば、そこでも地蔵は孤独である。しかし、地蔵は、その場にはいない死者や、拘束されている者たちのために佇んでいる。地蔵は、ここではじめて、祈りや救いや願いや鎮魂という本来の仕事に携わる。

《地蔵建立 北京編》が、それ以前の「地蔵建立」と違ってするのはそればかりではない。建立する主体である小沢の能動性が、それまでよりはずっと濃厚で、場合によっては拘引されかねな

い行為として「地藏建立」は遂行されている。

『白黒』に登場する地藏は、多摩川沿いの景色に取り囲まれていたり、夜の都会にいたり、中国の首都に設置されたりする。「作品」は地藏とそれが置かれる周辺の景色によって作られているかに見えるが、決してそうではないのだ。《地藏建立》においては、地藏とそれが置かれる場の視覚的關係を、彫刻的な、あるいは絵画的な地藏と景色を含んだ場の写真構図に仕立てて見せることが企図されているのではない。そうであるのならば、そこに言葉は不要なのである。自らの行為の痕跡を、地藏像や白黒画像や文章をとおして表そうとする「コトの全体」こそが《地藏建立》という作品なのである。

だから、地藏の造形性や写真の出来栄を論じてみても、この作品は見えてこない。地藏像は立体であっても、デッサンであっても、キットから作られた紙人形であってもかまわないのだ。写真は印画紙やグラビア印刷の画像でなくとも成り立つし、推敲された珠玉の披露である必要もない。『白黒』における小沢撮影の写真画像は、主人公である地藏がどこにいるのかさえ見きわめがたいことがあるほど、不鮮明なものであったが、それはそれで、のちに紹介されるようなきめ細やかな画像よりも、かえって表現力においてはまさっている。23、4歳の若者の感性は粗いテクスチャーのうちにこそ宿りうる、そう捉える評言があってもいいだろう。

『白黒』は簡易製本の同人誌だ。その誌面のマチエールはチープである。しかし、その安手でぞんざいな作りを小沢は是とし、そこにアナーキーな感性を転移させた。当時、芸大の学生の間では、まだハイ・アートへの疑いはそれほどなく、『白黒』のような同人誌のつくりや掲載された作品の質自体が既存の芸術への抵抗であり、彼らなりの新しい芸術の模索だったのだ。破れたジーンズが若者のファッションアイテムとなったように、『白黒』の破調は小沢の表現行為を促した。この『白黒』掲載の《地藏建立》には、たしかに、同じ写真が使われていたとしても、以後のそれとは異なる1980年代末の生き生きとした鼓動がそのままに息づいている。これは『白黒』という場においてしか、具現され得ない独自の質である。

おわりに

「地藏建立」という言葉は、通常は使われることがない。「建立」は、寺院の建築物を建てる際に用いられる言葉だ。仏像に対してこの言葉を使用するのは、「大仏建立」くらいで、これも「東大寺建立」とか「大仏殿建立」と書く方が適していて、「大仏造立」と記するのが正しいように思える。しかし、実際に「大仏建立」という語が流通しているのは、きっと建築物に比しうるモニュメンタルな大きさが認められるからなのだろう。その意味でも、立体にせよデッサン画像にせよ、小地藏に過ぎないものを設置する行為を「地藏建立」と呼ぶのは奇妙なことなのだ。小沢流のユーモアということもできるだろう。けれども、次のように考えることもできるのではないだろうか。

『白黒』における小沢剛《地蔵建立》

「地蔵建立」は多摩川沿い周辺から、上野・池袋界隈、北京へとひろがり、さらに1988年から2009年までの20年以上にわたる期間継続され、長く広い時空に拡散した。さらに『白黒』2号掲載の「JIZO PAPER KIT」を小沢以外の他者が組み立て、それを他者の選り取った場に設置することがあるとすれば【図30】、そのひろがりの可能性は果てしなくひらけてくる。“建立”によって生じるコトが、多摩川・上野・池袋・北京、それぞれで異なるように、地蔵キットがひろく流通していくことがあるとすれば、人により地域により、多層な意味をまといながら



【図30】 筆者が国会議事堂周辺でおこなった「地蔵建立」

ら、「地蔵建立」は膨張してゆくことになるだろう。そのとき、作品は「地蔵建立」の表記に値するスケールを具備する営為となってゆくだろう。そのひろがりや大きさは、たぶん、学生時代の小沢には、あるいは現在の小沢にあってさえも空想しがたい規模であったに違いない。

註

- (1) 小沢は日本での個展や展覧会への参加のみならず、世界中でも数多くの展覧会に招待されており、重要な作家として注目されているひとりといえる。2012年からは母校の東京芸術大学美術学部・先端芸術表現科の教員も務めている。多くの作品に共通する特徴として、ユーモアと批評性があるということがあげられる。また、人道的で、生活によりそった温かみのある作品も多い。
- (2) 小沢剛『地蔵建立 JIZOING』（オオタファインアーツ、1999年）と小沢剛『小沢剛世界の歩き方』（イシブレス、オオタファインアーツ、2001年）には、《地蔵建立》が1987年から制作されたと書かれているが、森美術館と広島市現代美術館で開催された各個展の図録には、《地蔵建立》が1988年から始められたと表記されている。正確な開始年を確認するため、小沢に問い合わせたところ、小沢のアシスタントの豊田歩実氏から1988年から制作開始が正しいとの回答をメールで得た（2017年11月16日）。また、『地蔵建立 JIZOING』（註2）の最終頁には、《地蔵建立》が1989年以来続けられていると書かれているが、これは誤りといえる。
- (3) 《地蔵建立》の先行研究としては、まず南雄介の「小沢剛—地蔵建立のポリティクス」（『美術手帖』8月号（美術出版社、1995年）、111頁）があげられる。南はこの数年後に、「救済のアイコン—《地蔵建立》について」（小沢剛『小沢剛世界の歩き方』（註2）、84-85頁）という文章も書いていて、その文中で《地蔵建立》の写真が青く調色されていることの重要性について言及している。神谷幸江も「今日も、明日も、明後日も」（小沢剛『透明ランナーは走りつづける』（広島市現代美術館、2009年）、6頁）の文中で、《地蔵建立》は「画面全体をいつも深く静かな青色で覆っている作品だ」と書いている。片岡真実と松井みどりも小沢の個展の図録に掲載した文章の中で、《地蔵建立》が青く調色されることの重要性について触れている（片岡真実「小沢ワールドへようこそ 同時に答える YES と NO！」、松井みどり「風景のほころび、アートの拡張：小沢剛の越境性」とともに『小沢剛：同時に答える YES と NO！』（森美術館、2004年）12-13頁と30頁を参照）。つまり、これまで最初に発表された『白黒』における《地蔵建立》には誰も言及していない。本論で扱っている『白黒』1号から3号は、筆者の指導教授である丹尾安典先生からお借りしたものである。

- (4) 『白黒』に使用されている写真をもとにした白黒画像は、紙焼き写真、および写真雑誌やグラビアなどを飾る白黒写真とは明らかに異なっているため、本論では「白黒の画像」や「白黒画像」または単に「画像」ということとする。
- (5) 松井みどり「風景のほころび、アートの拡張：小沢剛の越境性」『小沢剛：同時に答えろ YES と NO !』（註3）、29頁を参照。
- (6) 小沢剛『地蔵建立 JIZOING』（註2）の1頁目にあたる箇所（頁数がついていない）には「簡単な泥地蔵の作り方」が載っている。材料は「泥 or 砂 1-2kg、藁、水」となっていて、作り方も丁寧に書かれている。
- (7) 小沢剛『地蔵建立 JIZOING』（註2）、最終頁を参照。
- (8) 『小沢剛 同時に答えろ YES と NO !』（註3）に掲載されている、とよだふみ編「小沢剛39歳（作家略歴）」（156頁-169頁）を参照。
- (9) 小沢のアシスタント豊田氏のメールでの回答より（2017年11月16日）。
- (10) MINOLTA X-7 カタログ（1982年）を参照。
- (11) 「特別連載プロダクトフィルムカメラのある生活 Konica Hexar 伝説の名レンズを蘇らせた高級コンパクト（2016年12月23日）」Sunrise Camera HP (<https://sunset-camera.com/2016/12/23/konica-hexar/>) 参照（最終閲覧日：2018年9月17日）。
- (12) 『白黒』の制作過程や配布、販売に関する記述は小沢のアシスタント豊田氏のメールでの回答（2018年9月10日）を引用、参考にさせていただいた。
- (13) 『白黒』1号の目次を参照。『白黒』2号の編集には加藤、会田、松橋が携わっている。『白黒』3号には編集者の名前が書かれていないが、加藤らが担当したと思われる。
- (14) 《アジアの友達》と『白黒』1号の《地蔵建立》には連関があるが、それはまた別の機会に考察することとしたい。
- (15) 日本におけるワープロ（日本語ワードプロセッサ専用機）は1978年に東芝がJW-10を発表し、翌年の2月から出荷を開始した。1986年に急激に出荷台数を伸ばし、1989年に最大出荷数を記録した後、徐々に出荷台数が減少していった。『白黒』1号が創刊された1988年にはワープロが普及しており、価格も安定していたので、ワープロも使用できたのだろう（蔵琢也「日本語ワードプロセッサの興亡—定量指標からの考察—」（同志社大学 技術・資料・国際競争力研究センター リサーチペーパー-04-08、2004年）を参照）。
- (16) 註11と同様に、小沢のアシスタント豊田氏のメールでの回答（2018年9月10日）を引用、参考にさせていただいた。
- (17) 『白黒』1号では、中扉の画像の場所が示されていないが、後に《地蔵建立—羽田（多摩川編）[東京]》として発表される。以降、本論で中扉の画像は「羽田」で撮影されたものとして扱うこととする。
- (18) 小沢剛『地蔵建立 JIZOING』（註2）、最終頁。
- (19) 「小沢剛 35歳」聞き手／新川貴志、小沢剛『小沢剛世界の歩き方』（註2）、118頁。
- (20) 地蔵菩薩に関する記述については、田中久夫『地蔵信仰と民俗 [新装版]』（岩田書院、1995年）、下泉全暁『地蔵菩薩 地獄を救う路傍のほとけ』（春秋社、2015年）、望月信成『地蔵菩薩—その源と信仰をさぐる—』（学生社、1989年）、渡浩一『お地蔵さんの世界 救いの説話・歴史・民俗』（慶友社、2011年）を参照した。
- (21) 副島弘道、長沢市郎、水野敬三郎、藪内佐斗司「新薬師寺地蔵菩薩像修理研究報告」（『東京芸術大学美術学部紀要』第二十一号、1986年）を参照。
- (22) 「菩薩像は木の衣を着ていた」（『朝日新聞』朝刊、1984年10月19日）、22頁。
- (23) 『白黒』1号は左右開きの作りとなっていて、右開きから見る作品が①から⑤、左開きから見る作品が⑥から⑧だった。
- (24) 『小沢剛 同時に答えろ YES と NO !』（註3）に掲載されている、とよだふみ編「小沢剛39歳（作家略歴）」（156頁-169頁）を参照。
- (25) 『小沢剛 同時に答えろ YES と NO !』（註3）に掲載されている、とよだふみ編「小沢剛39歳（作家略歴）」

『白黒』における小沢剛《地藏建立》

(156頁-169頁)を参照。

- (26) 『小沢剛 同時に答えろ YESとNO!』(註3)に掲載されている、とよだふみ編「小沢剛39歳(作家略歴)」(156頁-169頁)を参照。
- (27) 1989年6月4日におこった天安門事件については、張良 編、アンドリュー・J・ネイサン、ペリー・リンク 監修、山田耕介、高岡正展 訳『天安門文書』(文藝春秋、2001年)、ハリソン・E・ソールズベリー、三宅真理、NHK取材班 訳『天安門に立つ——新中国40年の軌跡』(日本放送出版協会、1989年)、翰光『亡命 遥かなり天安門』(岩波書店、2011年)を参照。
- (28) ポール・ゴーガン 著、前川堅市 訳「ばら色の小蝦」『ゴーガン私記 アヴァン・エ・アプレ』(美術出版社、1984年) 51-52頁を参照。